



平成21年度  
ボランティア家族連絡会  
九州7県終了しました。



JICA, 県OB会、育てる会等が共催、JOCA九州が事務局として、毎年ご家族が集まる機会として開催しています。

今年も数多くのご家族の皆さんにお会いできました^^ご家族の持つ悩みは共通。「うちの子は元気でやっているのかしら・・・」「病気や治安の悪さで、大変な目にあってないだろうか？」関係者やOB・OGがそんな悩みも聞きつつ、解消できることは解消し、安心してご帰宅いただいています。来年も行ないますので、ご家族の皆様、是非参加されてください♪



H19-0次隊 ニカラグア 伊藤 文雄SV  
畜産加工 福岡県直方市出身  
ニカラグアは中央アメリカのほぼ真ん中に位置

## 主役はいつも地域の住民

活動期間は平成20年1月から22年1月までの2年間。職種は「牛乳衛生管理」。酪農家に対してどうすれば良質な牛乳を生産出来るかの指導である。ある農業大学の学長との出会いがあり、「是非この大学を活動拠点にしてもらえないか」と言われた。私も出来るだけ地域住民と接する活動をしたいと考えていたのでその旨を伝え、「うちの大学には村落普及担当者もいるから一緒にやれば良いよ」と言われ、その数日後には活動が始まっていた。第一に取り組んだのは、モデルとなる簡易搾乳舎作り。清潔な牛乳を生産するのは難しい事やそれ程資金が掛かるものではない事が直ぐに分かる様な施設である。二番目には乾季の粗飼料作りである。家畜には年間通して基礎的な飼料が必要である。しかし乾季には土地が枯渇し牧草が育たず、牛が瘦たり、死んでしまう事

もある。これを防ぐために取り組んだのが飼料木(シリオウボク)作りである。これは通年して家畜に与える事ができるため、この国では必要性が高い。酪農家はこれによって家畜の餌が確保出来る上、牛乳生産量も増え、収入増が期待できる。これらの活動をする際には村落の訪問を繰り返し、私が納得するのではなく、彼らが最も必要としている物は何かを彼らの目線で探し、そして話し合いを重ねた。活動する時はいつも『主役は地域の住民!』という姿勢でいた。彼らが求めているものは高い技術や高価なものではなく、誰でも直ぐに利用出来るもの。そしてボランティア活動に大切なのは『一つの事にこだわらず、柔軟な考え』を持つと言う事である。

処で、行動を共にした普及員は25歳の青年だが農家の人たちの気持ちを引き付ける事に長け、信頼された存在であった。家にも良く遊びに行き、おばあちゃんの料理をご馳走になったものだ。家族パーティーにも招待された。今でも互いに連絡を取り合っている。私生活は首都マナグアでホームステイをしていた。夫妻は好意的で、食事は彼らと同

じものを一緒に食べ、休日に家族と過ごすことが楽しみであった。今でも家族同然の付き合いをしている。彼らと一緒に暮らすことによって日本人が忘れかけている家族の大切さを改めて考える事が出来た。また他の楽しみと言えば協力隊の若者たちとの遊びや飲食を共にする事が、お互いに良い『はけ口』となった。わが子ほど歳は離れているが『心の通った年齢を超えた同胞』とも言うのであろうか?彼らとの出会いによって私の活動範囲も広がり、積極的に何にでも取り組む事が出来た。

ニカラグアは、中米諸国の中でも貧しい国だと言われているが、豊かな心を持っている人がたくさん居る。我々が学ばなければならない事も多く、羨ましいと思ったことは数知れない。



## かけがえのない体験

平成19年9月から21年9月までの2年間、モロッコで助産師として活動してきました。私の任地セフロー県は、首都ラバトから東へ230km。砂漠地帯とは違いモロッコの中でも比較的緑が多いところで、さくらんぼの産地で有名なところです。夏は日中40度以上で部屋はサウナの中にいるようで、冬は0度近くまで冷え込み寝袋にくるまり、更に毛布を重ね、湯たんぽを抱いてうずくまっていました。暑いイメージしかないモロッコでしたから、まさかこんなに寒い冬を経験するとは思っていませんでした。私は、自然豊かなセフロー県の県に一ツしかない総合病院で助産師として活動していました。モロッコ王国は近隣諸国に比べて妊産婦・乳幼児死亡率が非常

に高く(妊産婦死亡率は10万人に対し240人、日本は6人、乳幼児死亡率は1000人に対し34人、日本は4人)特に地方部での母子保健の改善が重点課題となっています。

配属先の病院には、JICAの集団研修に参加した4名の帰国研修員がいました。彼女たちは研修で経験した日本の母親教室に感銘を受け、配属先で母親学級を始めました。しかし、私が赴任してから母親学級は一度見ただけ。私はこの母親学級の再開を自らの活動の一つとして取り組みました。赴任当初は、ボランティアの理解がなく、私自身を受け入れてもらえるまでに時間を要し苦労しました。赴任して約1年後、母親学級を再開することができました。日本の妊婦体操を母親学級に取り入れてみると、同僚、妊婦さん共に興味を示してくれました。母親教室の回数は、年間回数10回から31回、参加者は、49人から343人となり、母親学級が定着し参加者が増加したことは嬉しい結果でした。また同僚と一緒に活動できたこと

ちゃんと過ごせた時間は私にとって助産師としてかけがえのない時間になりました。小学校の頃に見た国際協力のテレビをきっかけに、いつか参加できたらと夢に抱いていた青年海外協力隊への参加。2年間のボランティアへの参加は、言葉、文化が違うところで生活することや現地の人との触れ合いなどを通して数多くの感動、喜び、悩み葛藤した時間が自分と向き合える時間であり、いろんな自分自身の発見でもありました。また、言葉は通じなくても心の通じ合いができること、また通じなくてもわかろうと受け入れてくれるモロッコ人の優しさなど、本当に数多くのことを肌で感じ経験できました。参加前に思っていた参加できたことがゴールインではなく、新たな出発地点に立ったのだと今は思っています。

H19-2次隊 谷口 光代 JV

モロッコ派遣・助産師 鹿児島県出身

モロッコ王国はアフリカ大陸の北西にあり、スペインまでわずか14kmという距離。